

人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究(その2)

A Longitudinal Study of the Adaptive Processes of Students
in the Department of Human Environmental Studies (II)

中川 直志・石崎 保明・坂本 剛・高橋 陽子・内藤 徹

NAKAGAWA Naoshi, ISHIZAKI Yasuaki, SAKAMOTO Go, TAKAHASHI Yoko, NAITO Toru

Abstract: This is the second report of a series of studies on the adaptive processes in the Department of Human Environmental Studies at Nagoya Sangyo University. Some results of the first study, which appeared in Naito et al. (2005), suggested that the students coming to our newly established department in 2004 have only superficial understandings of human environmental studies and environmental studies. In this paper, taking Naito et al. (2005) as our point of departure, we present results of the survey conducted in April, 2005 to the same students as we did from September to October in 2004 and discuss the adaptive processes since then. In order to see whether the results of the previous questionnaires are specific to the students in question, the same questionnaires are also conducted to the students who newly entered our department in 2005. These data will be used to contribute to the advance of the human environmental studies as well.

Keywords: human environment, environmental psychology, adaptive processes, international sensibility

0. はじめに

本研究の目的は、名古屋産業大学人間環境マネジメント学科に所属する学生の入学後の適応過程を縦断的に調査し、その調査を通じて人間環境という学際的領域のあるべき方向性を模索し、同時に教育へフィードバックしていくことである。第1回目の調査は2004年9月から10月にかけて同学科のI期生を対象に実施され、その調査の結果と分析はすでに内藤・中川・石崎・坂本・高橋(2005)に示されている。本稿では、この内藤ら(2005)らの研究を出発点として、第1回目の調査から約半年を経過した平成17年4月に同期生を対象に行った調査の結果と照合し、その期間の適応過程を考察したものである(3節のみ、平成17年後期 Semester までの1年間の適応過程を扱っている)。

また、第2回の調査は、I期生に対して行った第1回のアンケートと同様の項目を用いてII期生に対しても行われている。この調査は、おもに、第1回の調査で得られた結果が、そのI期生に特有のものなのか、あるいは本学科に入学する学生に共通するものなのかを実証するためになされている。本研究の目的は縦断的研究にある以上、II期生に対する調査は、I期生への調査結果を検証するものではあるが、必要に応じて、言及されることになる。

本稿は、本節および5節を内藤と石崎が担当し、人間環境全般(1節)を中川、環境心理(2節)を石崎、学生生活の適応(3節)を坂本、国際性(4節)を高橋が担当し、本研究の監査役である内藤を含めた領域スタッフ全員で調査結果や分析の検討を経てまとめられている。

本節および5節を除き、各領域に対する執筆担当者は内藤ら(2005)のそれと同じであり、編集上、各節の執筆においては執筆者の意向を最大限に尊重している点もそれと変わっていないことを断っておく。

0 節引用文献

内藤徹・中川直志・石崎保明・坂本剛・高橋陽子(2005) 「人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究」 『名古屋産業大学論集』第7号, 67-77.

1. 人間環境に対する認識について⁽¹⁾

1.1. 調査結果

1.1.1. 概要

2005年度前期のアンケート調査(以下、今回調査と略す。)は2005年度入学生(以下、Ⅱ期生と略す。)と2004年度入学生(以下、Ⅰ期生と略す。)のそれぞれについて行われた。それぞれに興味深い結果が得られたが、本稿のタイトルにもあるように本研究の重点は縦断的考察にある。Ⅱ期生のデータは次回調査の結果と比較し、さらにそれをⅠ期生の通時的推移と比較することにより、総覧に値するものとなるであろう。今回の調査結果の興味がⅠ期生の入学後の意識変化に向かわざるを得ないのも止むを得ざるところである。そこで、Ⅱ期生のデータについては、それがⅠ期生のデータと基本的差異を示していないことのみを述べることとし、本章ではⅠ期生の意識変化に絞って論を進める。なお、今回調査に回答したⅠ期生は26名であり、この内24名が2004年度後期の調査(以下前回調査と略す。)に回答している。本章で比較の対象とするデータはこの24名の前回調査結果と今回調査結果である。

1.1.2. 2005年度前期調査結果(Ⅰ期生)

今回調査に回答したⅡ期生26名の内、前回調査に回答した24名の今回調査における回答結果は以下の通りである。なお、表中の回答数の合計は必ずしも回答者数(あるいはその倍数、等)と一致しない。これは設問や選択肢によって無回答や複数回答が見られたためである。当然のことながら、無回答をデータに含めることはできない。しかし、複数回答を想定していない設問での複数回答(第一選択で複数の選択肢を回答する、等)についてはそれを積極的意思表示とみなし、データに算入している。

表 1-1 人間環境に関する質問事項に対する回答結果(表内左上の記号は質問番号を示す)

質問	A-1								
	「環境」という言葉を聞いてあなたがイメージすることは何ですか。(自由回答) (生活環境には建築としての家、社会環境を含む)								
	自然環境	インフラ	生活環境	家庭環境	人間関係	周囲	文化	その他	
選択数	16	1	4	1	1	0	0	3	
%	61.54	3.85	15.38	3.85	3.85	0.00	0.00	11.54	

質問	A-2									
	人間環境の例として思い浮かぶものを2つ以上挙げてください。(自由回答)									
	対人関係、心理	会社	政治	文化・歴史	生活環境	社会インフラ	家族	学校	自然環境	言語
選択数	13	0	1	5	4	6	2	0	3	1
%	37.14	0.00	2.86	14.29	11.43	17.14	5.71	0.00	8.57	2.86

質問	A-3 (人間環境分野に分類される学問を2つ以上挙げてください。)									
	人間環境分野に分類される学問を2つ以上挙げてください。(自由回答)									
	心理学	環境心理	言語学	文化環境	家庭環境	環境学・自然環境	社会環境	福祉	人間環境学	経営学
選択数	11	1	0	6	0	6	7	0	0	0
%	35.48	3.23	0.00	19.35	0.00	19.35	22.58	0.00	0.00	0.00

質問	A-4		A-5					
	人間環境について学んでいる、あるいは学んだという実感がありますか。		本学での講義を受講してあなたの人間環境に対するイメージが変わりましたか。		解答パターン (A-4, (A-5) の順			
	(a) ある	(b) ない	(a) はい	(b) いいえ	(a) (a)	(a) (b)	(b) (a)	(b) (b)
選択数	15	9	12	12	11	2	1	10
%	62.50	37.50	50.00	50.00	45.83	8.33	4.17	41.67

質問	A-6					
	(学問分野としての) 人間環境分野の中で最も興味ある分野は何ですか。(a) 文化環境 (b) 心理 (c) 家庭環境 (d) 言語環境 (e) その他 () (f) 人間環境分野の具体的内容がまだよくわからない。					
	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)
選択数	7	20	9	3	0	0
%	17.95	51.28	23.08	7.69	0.00	0.00

質問	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください(優先順に)。(第一選択)										
	建設・不動産、	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	3	0	0	0	1	2	1	10	3	1	2
%	13.04	0.00	0.00	0.00	4.35	8.70	4.35	43.48	13.04	4.35	8.70

質問	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください(優先順に)。(第二選択)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	1	0	1	2	0	1	0	5	6	4	1
%	4.76	0.00	4.76	9.52	0.00	4.76	0.00	23.81	28.57	19.05	4.76

質問	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください(優先順に)。(第一、第二選択)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	4	0	1	2	1	3	1	15	8	5	3
%	9.30	0.00	2.33	4.65	2.33	6.98	2.33	34.88	18.60	11.63	6.98

質問	A-6、A-7 選択パターン								
	(a)文化 環境(a) 建設・不 動産、	(a)文化 環境(f) 卸売・小 売	(a)文化 環境(h) 医療・福 祉	(a)文化 環境(j) サービ ス	(b)心理 (a)建 設・不動 産、	(b)心理 (e)飲食 業・宿泊	(b)心理 (f)卸 売・小売	(b)心理 (g)金融	(b)心 理(h) 医療・福 祉
選択数	1	1	4	1	2	1	2	1	8
%	2.63	2.63	10.53	2.63	5.26	2.63	5.26	2.63	21.05

(b)心理 (i)教育	(b)心 理(j)サ ービス	(b)心理 (k)その 他	(c)家庭 環境(e) 飲食 業・宿泊	(c)家庭 環境(f) 卸売・小 売	(c)家庭 環境(h) 医療・福 祉	(c)家 庭環境 (k)その 他	(d)言語 環境(f) 卸売・小 売	(d)言語 環境(h) 医療・福 祉
3	1	1	1	1	6	1	1	2
7.89	2.63	2.63	2.63	2.63	15.79	2.63	2.63	5.26

質問	A-8					A-9				
	人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職 を考える上で役に立つと考えられます か。(a)役に立つと思う (b)どちらか と言えば役に立つと思う (c)どちら でもない(d)どちらかと言えば役に立た ないと思う (e)役に立たない					人間環境分野で学ぶ内容に学問的興味を 抱きますか。 (a)興味を抱く (b)どちらかと言 えば興味を抱く (c)どちらでもない (d)どちらかと言えば興味を抱かない (e)興味を抱かない				
	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
選択数	8	14	2	0	0	12	7	3	2	0
%	33.33	58.33	8.33	0.00	0.00	50.00	29.17	12.50	8.33	0.00

A-8, A-9 選択パターン														
	(a)(a)	(a)(b)	(a)(c)	(a)(d)	(b)(a)	(b)(b)	(b)(c)	(b)(d)	(c)(a)	(c)(b)	(c)(c)	(c)(d)	(d)(a)	(d)(b)
選 択 数	6	1	0	1	6	6	2	1	0	0	1	0	0	0
%	25.00	4.17	0.00	4.17	25.00	25.00	8.33	4.17	0.00	0.00	4.17	0.00	0.00	0.00

質問	A-10	
	環境情報ビジネス学科と人間環境マネジメント学科の間にある違い(学修内容やめざす目標のちがいを自分なりにイメージできますか。どれか一つに○。	
	(a) はい	(b) いいえ
選択数	10	12
%	45.45	54.55

質問	A-12										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一選択)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	1	1	0	1	1	2	1	8	2	4	1
%	4.55	4.55	0.00	4.55	4.55	9.09	4.55	36.36	9.09	18.18	4.55

質問	A-12										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第二選択)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	2	0	0	0	0	1	1	5	7	2	0
%	11.11	0	0	0	0	5.56	5.56	27.78	38.89	11.11	0

質問	A-12										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一・二選択)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	3	1	0	1	1	3	2	13	9	6	1
%	7.50	2.50	0.00	2.50	2.50	7.50	5.00	32.50	22.50	15.00	2.50

質問	A-13										
	あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一希望)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	1	0	0	1	2	0	1	9	2	2	3
%	4.76	0.00	0.00	4.76	9.52	0.00	4.76	42.86	9.52	9.52	14.29

質問	A-13										
	あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第二希望)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	1	0	0	2	1	12	0	6	7	2	2
%	3.03	0.00	0.00	6.06	3.03	36.36	0.00	18.18	21.21	6.06	6.06

質問	A-13										
	あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一・二希望)										
	建設・不動産	製造	運輸	情報・通信	飲食業・宿泊	卸売・小売	金融	医療・福祉	教育	サービス	その他
選択数	2	0	0	2	3	2	1	15	8	4	5
%	4.76	0.00	0.00	4.76	7.14	4.76	2.38	35.71	19.05	9.52	11.90

質問	A-12(第1選択) A-13(第1選択) 選択パターン													
	A-12 本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一選択) A-13 あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一希望)													
	(a) 建設・不動産	(b) 製造	(d) 情報・通信	(e) 飲食業・宿泊	(f) 卸売・小売	(f) 卸売・小売	(h) 医療・福祉	(h) 医療・福祉	(h) 医療・福祉	(i) 教育	(j) サービス	(j) サービス	(j) サービス	(k) その他
	(j) サービス	(k) その他	(i) 教育	(e) 飲食業・宿泊	(e) 飲食業・宿泊	(h) 医療・福祉	(a) 建設・不動産	(h) 医療・福祉	(i) 教育	(k) その他	(g) 金融	(h) 医療・福祉	(j) サービス	(d) 情報・通信
選択数	1	1	1	1	1	1	1	6	1	1	1	2	1	1
%	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	30.00	5.00	5.00	5.00	10.00	5.00	5.00

1.1.3. 2004年度前期調査結果 (I期生)

今回調査に回答したI期生の前回調査における回答結果は以下の通りである。処理方法は前節と同様である。

表 1-2 人間環境に関する質問事項に対する回答結果（表内左上の記号は質問番号を示す）

質問	A-1								
	「環境」という言葉を聞いてあなたがイメージすることは何ですか。 (生活環境には建築としての家、社会環境を含む)								
	自然環境	インフラ	生活環境	家庭環境	人間関係	周囲	文化	その他	
選択数	17	0	6	1	0	0	1	0	
%	68.00	0.00	24.00	4.00	0.00	0.00	4.00	0.00	

質問	A-2									
	人間環境の例として思い浮かぶものを2つ以上挙げてください。									
	対人関係、心理	会社	政治	文化・歴史	生活環境	社会インフラ	家族	学校	自然環境	言語
選択数	10	1	1	2	6	5	2	1	9	1
%	26.32	2.63	2.63	5.26	15.79	13.16	5.26	2.63	23.68	2.63

質問	A-3（人間環境分野に分類される学問を2つ以上挙げてください。）									
	人間環境分野に分類される学問を2つ以上挙げてください。									
	心理学	環境心理	言語学	文化環境	家庭環境	環境学・自然環境	社会環境	福祉	人間環境学	経営学
選択数	17	1	8	5	2	6	0	1	0	0
%	42.50	2.50	20.00	12.50	5.00	15.00	0.00	2.50	0.00	0.00

質問	A-4		A-5					
	人間環境について学んでいる、あるいは学んだという実感がありますか。		本学での講義を受講してあなたの人間環境に対するイメージが変わりましたか。		解答パターン（A-4, (A-5)の順			
	(a) ある	(b) ない	(a) はい	(b) いいえ	(a) (a)	(a) (b)	(b) (a)	(b) (b)
選択数	13	9	8	15	4	7	3	7
%	59.09	40.91	34.78	65.22	19.05	33.33	14.29	33.33

質問	A-6					
	(学問分野としての) 人間環境分野の中で最も興味ある分野は何ですか。(a) 文化環境 (b) 心理 (c) 家庭環境 (d) 言語環境 (e) その他 () (f) 人間環境分野の具体的内容がまだよくわからない。					
	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)
選択数	6	18	4	1	0	0
%	20.69	62.07	13.79	3.45	0.00	0.00

質問	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください(優先順に)。(第一選択)										
	(a)建設・不動産、	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
選択数	1	0	0	0	1	0	2	12	5	2	0
%	4.35	0	0	0	4.35	0	8.70	52.17	21.74	8.70	0.00

質問	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください(優先順に)。(第二選択)										
	(a)建設・不動産、	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
選択数	2	0	1	2	1	1	0	7	5	4	0
%	8.70	0.00	4.35	8.70	4.35	4.35	0.00	30.43	21.74	17.39	0.00

質問	A-7										
	(学問分野としての) 人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください(優先順に)。(第一、二選択)										
	(a)建設・不動産、	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
選択数	3	0	1	2	2	1	2	19	10	6	0
%	6.52	0.00	2.17	4.35	4.35	2.17	4.35	41.30	21.74	13.04	0.00

A-6、A-7 選択パターン														
	(a)	(a)	(a)	(a)	(a)	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)	(b)	(c)	(c)	(d)
	(a)	(g)	(h)	(i)	(j)	(a)	(e)	(g)	(h)	(i)	(j)	(a)	(h)	(h)
選択数	1	1	1	1	1	1	1	1	9	4	1	1	2	1
%	3.85	3.85	3.85	3.85	3.85	3.85	3.85	3.85	34.62	15.38	3.85	3.85	7.69	3.85

質問	A-8					A-9				
	人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。(a)役に立つと思う (b)どちらかと言えば役に立つと思う (c)どちらでもない(d)どちらかと言えば役に立たないと思う (e)役に立たない					人間環境分野で学ぶ内容に学問的興味を抱きますか。(a)興味を抱く (b)どちらかと言えば興味を抱く (c)どちらでもない (d)どちらかと言えば興味を抱かない (e)興味を抱かない				
	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
選択数	8	12	4	1	0	7	12	4	2	0
%	32.00	48.00	16.00	4.00	0.00	28.00	48.00	16.00	8.00	0.00

A-8, A-9 選択パターン												
	(A-8)人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。 (a)役に立つと思う (b)どちらかと言えば役に立つと思う (c)どちらでもない (d)どちらかと言えば役に立たないと思う (e)役に立たない (A-9)人間環境分野で学ぶ内容に学問的興味を抱きますか。 (a)興味を抱く (b)どちらかと言えば興味を抱く (c)どちらでもない (d)どちらかと言えば興味を抱かない (e)興味を抱かない											
	(a)	(a)	(a)	(b)	(b)	(b)	(b)	(c)	(c)	(c)	(c)	(d)
	(a)	(b)	(c)	(a)	(b)	(c)	(d)	(a)	(b)	(c)	(d)	(b)
選択数	3	4	1	3	5	2	1	1	1	1	1	1
%	12.50	16.67	4.17	12.50	20.83	8.33	4.17	4.17	4.17	4.17	4.17	4.17

質問	A-10	
	環境情報ビジネス学科と人間環境マネジメント学科の間にある違い(学修内容やめざす目標のちがいを自分なりにイメージできますか。どれか一つに○。	
	(a) はい	(b) いいえ
選択数	6	19
%	24.00	76.00

質問	A-12										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一選択)										
	(a)建設・不動産、	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
選択数	0	0	0	1	0	0	1	14	3	4	0
%	0.00	0.00	0.00	4.35	0.00	0.00	4.35	60.87	13.04	17.39	0.00

質問	A-12										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第二選択)										
	(a)建設・不動産、	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
選択数	1	1	0	1	0	1	0	5	10	3	1
%	4.35	4.35	0.00	4.35	0.00	4.35	0.00	21.7	43.48	13.04	4.35

質問	A-12 (第一・第二選択)										
	本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一・二選択)										
	(a)建設・不動産、	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
選択数	1	1	0	2	0	1	1	19	13	7	1
%	2.17	2.17	0.00	4.35	0.00	2.17	2.17	41.30	28.26	15.22	2.17

質問	A-13										
	あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一希望)										
	(a)建設・不動産、	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
選択数	1	0	1	1	2	0	2	10	2	4	1
%	4.17	0.00	4.17	4.17	8.33	0.00	8.33	41.67	8.33	16.67	4.17

質問	A-13										
	あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第二希望)										
	(a)建設・不動産、	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
選択数	4	2	1	3	0	2	1	2	5	3	0
%	17.39	8.70	4.35	13.04	0.00	8.70	4.35	8.70	21.74	13.04	0.00

質問	A-13										
	あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一・二希望)										
	(a)建設・不動産、	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
選択数	5	2	2	4	2	2	3	12	7	7	1
%	10.64	4.26	4.26	8.51	4.26	4.26	6.38	25.53	14.89	14.89	2.13

	A-12(第1選択) A-13(第1選択) パターン分析											
	A-12 本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。(第一選択) A-13 あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。(第一希望)											
	(d)	(g)	(h)	(h)	(h)	(h)	(i)	(i)	(i)	(j)	(j)	(j)
	(h)	(g)	(a)	(d)	(i)	(j)	(h)	(c)	(e)	(k)	(e)	(j)
選択数	1	1	1	1	1	1	9	1	1	1	1	2
%	4.55	4.55	4.55	4.55	4.55	4.55	40.91	4.55	4.55	4.55	4.55	9.09

1.2. 考察

1.2.1. 人間環境に対する認識

前回と今回におけるA-1(「環境」という言葉を聞いてあなたがイメージすることは何ですか)の回答結果に大差はなく、環境という言葉に対する直感的イメージは相変わらず自然環境のようである。しかし話が「人間環境」になると一定の学生に意識変化が起こっていることが読み取れる。前回、A-2(人間環境の例として思い浮かぶものを2つ以上挙げてください。)の回答で自然環境と回答した学生が23.68%に上ったのに対し、今回調査では前回の3分の1程度(8.57%)となっている。自然環境絶対のイメージから「脱皮」した学生の受け皿となったのは心理と文化であると考えていだろう。

心理系に対する関心の高さは今更言うまでもないが、A-3(人間環境分野に分類される学問を2つ以上挙げてください。)における比較は、文化環境を含む社会環境(あるいは社会工学系)への傾倒を示唆している。言語がその数を減らし、その分社会環境が数を伸ばしている。ただし、これが直ちに人間環境系学問の認知の変化と捉えられるかは、さらに検討の余地があるだろう。A-4(人間環境について学んでいる、あるいは学んだという実感がありますか。)の比較は人間環境について学んでいるという意識を持った学生の割合が殆ど変化していないことを示しているが、その一方で、A-5(本学での講義を受講してあなたの人間環境に対するイメージが変わりましたか。)における変化は人間環境に対するイメージを変えた学生が若干増えたことを示している。矛盾するデータのようにも見えるが、前回から今回にかけて、つまり1年次の科目構成等も影響しているであろうことは想像に難くない。A-6(学問分野としての)人間環境分野の中で最も興味ある分野は何ですか。)における言語の選択率の推移は、言語への興味自体が、低いレベルではあるが、一定の割合を維持している(あるいは若干上昇している)ことを示している。(科学としての言語への関心が低いこと自体は、日本において外国語系学部や英文系学部でさえも、学生の言語への関心が未だに「英語がうまくなりたい」レベルの言語習得に止まるケースが多いことを踏まえれば、想定範囲内である。)心理もその割合を減らしたことを合わせて考えると、環境心理における1年次教育の見直しは急務である。言語も心理も1年次の科目は選択肢が一つしかない。学生がその学問の一端に触れる機会そのものが少ないことは明らかであり、今後の様々な方面からの検討が必要である。

1.2.2. 人間環境からの職業観

A-7(学問分野としての)人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。)の前回調査と今回調査を比較してみると、就職先として、医療・福祉への関心が、若干その割合を減らしたものの、以前として根強いことが分かる。これ以外の全般的傾向(サービス業への関心の高さ、等)にも特段の変化は感じられないが、医療・福祉から方向転換した学生の動機は今後調査が必要であろう。端的に言えば「新たな目標の発見」なのか「あきらめ」なのかの見極めである。予断はできないが、いずれにしても医療・福祉系を目指す学生への更なる対応が求められ続けていることは事実である。

A-12(本学人間環境マネジメント学科の卒業生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください。)とA-13(あなたの就職希望分野について2つ挙げてください。)においても、A-7(学問分野としての)人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えら

れる分野を2つ挙げてください。)と同様の傾向が見られるが、少なくとも医療・福祉に限って言えば、今回の回答結果の方が、A-12とA-13の間の選択率の差が少ないように思われる。つまり、人間環境の学問内容に対する認識と職業観が噛み合っている学生が、少なくともこの分野でははっきりしてきたということである。A-7で方向転換した学生がA-12でも医療・福祉から離れた結果と見ることもできよう。(前回調査ではA-12において医療・福祉を選択した学生がA-13において医療福祉を選択した学生を大きく上回っていた。)また別な見方をすれば、今回調査におけるA-12とA-13の医療・福祉の選択率の近似は、同分野を志望する学生の意思の固さを物語るものである。前回調査においてA-12、A-13における医療・福祉の選択率が今回以上に高かったことからしても、この意思は入学してから醸成されたものではない。従って、A-12とA-13における医療・福祉の選択率の近似は、本学における同分野の教育が職業観に沿うものになっているかどうかとは別問題である。むしろ本学での一年間は、漠然と医療・福祉を念頭においていた学生を同分野から引き離れた感もある。もしこれがその通りであるとすれば、同分野志望の意思が固い学生にとって、この一年間がどの程度その知的欲求を満たすものであっただろうか。興味深い調査対象ではある。しかし、医療・福祉志望の学生への更なる対応が求められていることは先に述べた通りであり、それが調査を待つまでもないことも大方の一致するところであろう。医療・福祉を志望する学生の多くは心理に関心を寄せている(A-6((学問分野としての)人間環境分野の中で最も興味ある分野は何ですか。)、A-7((学問分野としての)人間環境分野を学んだ学生らしい就職先として考えられる分野を2つ挙げてください)選択パターンを参照されたい。)。従って、その対応は前節で指摘した問題も踏まえて行われるべきであろう。

A-9(人間環境分野で学ぶ内容に学問的興味を抱きますか。)は、人間環境に対する自らの関心を意識できる学生が、若干ではあるが増えていることを示している。また、A-10(環境情報ビジネス学科と人間環境マネジメント学科の間にある違い(学修内容やめざす目標のちがいを自分なりにイメージできますか。))における変化は、人間環境と物理的環境を区別できる学生の増加を示している。これらは本学における1年間の教育が一定の成果を上げていることを示唆するものといえよう。その一方で、A-8(人間環境分野で学ぶ内容がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。)において殆ど変化が見られなかったことは、依然として学習内容と職業観が乖離している学生も少ないことを示唆している。

1.3. 「人間環境」アンケートを通じて

前回調査と今回調査の間には半年程度の間隔しかないが、いくつかの重要な変化が観察された。ここで詳しく繰り返すことはしないが、1年次教育の重要性が明らかになったことは特筆すべきである。これは1年終了時に事実上専門ゼミの選択が行われることを考えれば現実的問題であり、環境心理という言葉に囚われることなく、広く人文学的素養・関心(特に、抽象的かつ論理的思考能力)の醸成に努める必要があるだろう。1.2.2節で指摘したことの一部は前回調査でも指摘されたことであり、議論の活性化を実質的改善に結びつけたい。

今回の調査には人間環境学科開設以来の教育成果を示すデータも複数含まれていた。その一方で、今回のサンプル数が前回に比べ大幅に減少してしまっていることには注意を喚

起しておく必要がある。単に今回のデータが学科全般の傾向を反映していない可能性があるというだけでなく、回収率の低下が学科発展に対する全般的関心の低下を示すものではないかと危惧するからである。現に、教育現場では特定分野に限らず、学問全般に対する関心と呼び覚ますのに腐心している。仮に、アンケートに回答しなかった学生にこのような学生が多く含まれているのであれば、学科発展のために真に必要としているデータが、回収されなかった調査票の中に埋もれてしまった可能性は十分にある。サンプル数の減少が意味するのは研究の崩壊だけではない。人間環境を扱った本節の調査結果が調査全般に対する人間環境学科全体の関心を少しでも呼び覚ますものになれば幸いである。

1 節注

(1) 1 節の執筆は中川が担当した。

2. 環境心理領域に関する調査⁽¹⁾

2.1. 考察の目的と対象

本節の主要な目的は、2年生((平成16年度入学生。以下、I期生とよぶ)を対象に2005年前期 Semester に実施したアンケート結果(以下、今回の調査とよび、表内ではI(05)前と表記する)と、2004年後期に同じ学生を対象としたアンケート結果(以下、前回の調査とよび、表内ではI(04)後と表記する)とを比較することにより、人間環境マネジメント学科所属学生の半年間における環境心理領域(以下、「領域」とよぶ)に対する意識の変化を考察することである。2005年前期 Semester では、1年生((平成17年度入学生。以下、II期生とよぶ)を対象に、II期生に対して2004年度後期に実施したものと同様の項目でアンケート(以下、II(05)前と表記する)を実施しているが、紙幅の都合により今回は調査結果のみを提示する。なお、この調査の回答者はすべて人間環境マネジメント学科の学生であるが、そのすべてが必ずしも環境心理領域の専攻を希望しているわけではないということを予め断っておく。

2.2. I期生の意識の変化に関する縦断的研究

2.2.1. 調査項目と結果

「領域」に関する調査項目およびその集計結果は以下のとおりである(B・6は記述回答であるためここでは除外する)。各々の表において、パーセンテージと()内に示される数字は、それぞれ、回答数全体に対する割合と回答実数を表している。また、アンケート実施日の横にあるIはI期生を、IIはII期生を表している。今回の調査では、I期生への質問に対する回答数は、前回の調査と比べて半減しており、少ない回答数でも全体の割合が高くなる傾向があることに注意されたい。

表 2・1 B-1 の集計結果

大学で学びたい学問または分野は何ですか。(例えば歴史や文化、環境といったキーワードで構いません。
(回答数: I (04)後(109), I (05)前(52), II (05)前(130))

B-1	心理	環境	歴史	福祉	文化人類学	文化	言語学	生物学	情報	法律
I (04)後	22.94% (25)	7.33% (8)	16.51% (18)	2.75% (3)	0.00% (0)	7.33% (8)	2.75% (3)	0.92% (1)	9.17% (10)	0.00% (0)
I (05)前	30.7% (16)	9.62% (5)	7.69% (4)	5.78% (3)	5.78% (3)	5.78% (3)	3.85% (2)	3.85% (2)	1.92% (1)	1.92% (1)
II (05)前	31.53% (41)	7.69% (10)	6.92% (9)	0.00% (0)	0.00% (0)	6.15% (8)	6.15% (8)	0.00% (0)	3.85% (5)	1.54% (0)

	人間関係	マネジメント	日本	人間環境	パソコン	教育	街	発達心理	臨床心理	行動心理
I (04)後	0.00% (0)	2.75% (3)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)
I (05)前	1.92% (1)	1.92% (1)	1.92% (1)	1.92% (1)	1.92% (1)	1.92% (1)	1.92% (1)	1.92% (1)	1.92% (1)	1.92% (1)
II (05)前	0.00% (0)	3.85% (5)	0.00% (0)	0.77% (1)	1.54% (2)	2.30% (3)	0.00% (0)	0.77% (1)	1.54% (2)	0.00% (0)

	影響	社会学	英語	公民(家庭科)	人間	体育	地理	芸術	自然	住環境
I (04)後	0.00% (0)	0.00% (0)	3.85% (5)	4.59% (5)	4.59% (5)	3.67% (4)	2.75% (3)	2.75% (3)	0.92% (1)	0.92% (1)
I (05)前	1.92% (1)	1.92% (1)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)
II (05)前	0.00% (0)	0.77% (1)	3.85% (5)	0.00% (0)	0.00% (0)	1.54% (2)	1.54% (2)	1.54% (2)	0.77% (1)	0.00% (0)

	医療	考古学	経済学	環境心理	経済学	化学	地球科学	不動産	文学	ビジネス
I (04)後	0.92% (1)	0.92% (1)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)
I (05)前	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)
II (05)前	0.77% (1)	0.77% (1)	3.08% (4)	3.08% (4)	3.08% (4)	1.54% (2)	0.77% (1)	0.77% (1)	0.77% (1)	0.77% (1)

	医療	社会心理学	文書処理	生活環境	化学
I (04)後	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)
I (05)前	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)	0.00% (0)
II (05)前	0.77% (1)	0.77% (1)	0.77% (1)	0.77% (1)	0.77% (1)

表 2・2 B-2 の集計結果

環境心理として思い浮かぶものを2つ挙げてください。(回答数: I (04)後(86), I (05)前(56), II (05)前(125))

B-2	心理	家庭	環境	人間	文化	言語	自然	その他
I (04)後	16.28% (14)	18.60% (16)	9.30% (8)	9.30% (8)	8.14% (7)	6.98% (6)	6.98% (6)	24.41% (21)
I (05)前	8.93% (5)	8.93% (5)	7.14% (4)	0.00% (0)	1.79% (1)	5.36% (3)	0.00% (0)	67.86% (38)
II (05)前	18.40% (23)	7.20% (9)	13.60% (17)	9.60% (12)	0.80% (1)	4.80% (6)	10.40% (13)	29.60% (37)

表2-3 B-3の集計結果

環境心理分野に分類される学問名を2つ挙げてください。(回答数: I(04)後(73), I(05)前(41), II(05)前(92))						
B-3	心理学	社会心理	環境心理	環境	社会環境	その他
I(04)後	27.40% (20)	2.74% (2)	4.11% (3)	0.00% (0)	1.37% (1)	64.38% (47)
I(05)前	21.95% (9)	14.63% (6)	7.32% (3)	4.88% (2)	4.88% (2)	46.34% (19)
II(05)前	18.48% (17)	9.78% (9)	4.35% (4)	5.43% (5)	0.00% (0)	62.00% (0)

表2-4 B-4の集計結果

B-4の(a)(b)(c)の分野はそれぞれ関連性があると思いますか。(回答数: I(04)後(47), I(05)前(22), II(05)前(64))		
B-5	思う	思わない
I(04)後	70.21% (33)	29.79% (14)
I(05)前	77.27% (17)	22.73% (5)
II(05)前	6.719% (43)	32.81% (21)

表2-5 B-5の集計結果

環境心理領域の中で最も興味のある分野は何ですか。(回答数: I(04)後(52), I(05)前(23), II(05)前(68 (その他3含))			
B-4	心理学	家庭環境	言語環境
I(04)後	76.9% (40)	15.38% (8)	7.69% (4)
I(05)前	69.57% (16)	21.74% (5)	8.70% (2)
II(05)前	80.88% (55)	8.82% (6)	5.88% (4)

表2-6 B-7の集計結果

環境心理領域で学ぶ内容に対して学問的興味を抱きますか。(回答数: I(04)後(46), I(05)前(25), II(05)前(64))					
B-7	(a)非常に興味を抱く。	(b)どちらかといえば、興味を抱く。	(c)どちらでもない。	(d)あまり興味を抱かない。	(e)全く興味を抱かない。
I(04)後	28.26% (13)	56.52% (26)	13.04% (6)	2.17% (1)	0.00% (0)
I(05)前	48.00% (12)	40.00% (10)	8.00% (2)	4.00% (1)	0.00% (0)
II(05)前	37.50% (24)	46.88% (30)	10.94% (7)	4.69% (3)	0.00% (0)

表2-7 B-8の集計結果(第1選択)

(本学のカリキュラムとは別に、一般的な話として)環境心理分野を学んだ学生らしい就職先として考えられるものを2つ挙げてください。(優先順位でお書きください。)(第1選択: 回答数: I(04)後(48), I(05)前(28), II(05)前(73))						
B-8(第1)	(a)建設・不動産	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売・小売
I(04)後	6.25% (3)	4.17% (2)	0.00% (0)	6.25% (3)	4.17% (2)	0.00% (0)
I(05)前	7.14% (2)	0.00% (0)	10.71% (3)	10.71% (3)	3.57% (1)	0.00% (0)
II(05)前	10.95% (8)	1.37% (1)	0.00% (0)	12.32% (9)	6.85% (5)	4.11% (3)

	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
I(04)後	2.08% (1)	45.83% (22)	20.83% (10)	10.42% (5)	0.00% (0)
I(05)前	3.57% (1)	46.43% (13)	10.71% (3)	3.57% (1)	3.57% (1)
II(05)前	5.48% (4)	28.77% (21)	20.55% (15)	4.11% (3)	5.48% (4)

表2-8 B-8の集計結果(第2選択)

(本学のカリキュラムとは別に、一般的な話として)環境心理分野を学んだ学生らしい就職先として考えられるものを2つ挙げてください。(優先順位でお書きください。)(第2選択: 回答数: I(04)後(46), I(05)前(27), II(05)前(72))

B-8(第2)	(a)建設・不動産	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売り・小売
I(04)後	6.52% (3)	2.17% (1)	0.00% (0)	8.70% (4)	0.00% (0)	4.35% (2)
I(05)前	11.11% (3)	0.00% (0)	0.00% (0)	3.70% (1)	7.41% (2)	14.81% (4)
II(05)前	5.56% (4)	0.00% (0)	1.39% (1)	12.5% (9)	6.94% (5)	4.17% (3)

B-8	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
I(04)後	6.52% (3)	23.91% (11)	34.78% (16)	13.04% (6)	0.00% (0)
I(05)前	0.00% (0)	14.81% (4)	29.63% (8)	18.52% (5)	0.00% (0)
II(05)前	5.56% (4)	29.17% (21)	20.83% (15)	4.17% (3)	5.56% (4)

表2-9 B-8の集計結果(全体(第1位+第2位))

(本学のカリキュラムとは別に、一般的な話として)環境心理分野を学んだ学生らしい就職先として考えられるものを2つ挙げてください。(優先順位でお書きください。)(全体(1位+2位): 回答数: I(04)後(94), I(05)前(55), II(05)前(145))

B-8(1+2)	(a)建設・不動産	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売り・小売
I(04)後	6.38% (6)	3.19% (3)	0% (0)	7.45% (7)	2.13% (2)	2.13% (2)
I(05)前	9.09% (5)	0% (0)	5.45% (3)	7.27% (4)	5.45% (3)	7.27% (4)
II(05)前	8.28% (12)	0.69%(1)	0.69%(1)	8.28% (12)	4.83% (7)	4.83% (7)

B-8	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
I(04)後	4.26% (4)	35.11% (33)	27.66% (26)	11.70% (11)	0.00% (0)
I(05)前	1.82% (1)	30.91% (17)	20.00% (11)	10.91% (6)	1.82% (1)
II(05)前	5.52% (8)	23.45% (34)	26.21% (38)	9.66% (14)	7.59% (11)

表2-10 B-9の集計結果

環境心理領域で学ぶ内容(心理・家庭環境・言語環境など)がこれから就職を考える上で役に立つと考えられますか。(回答数: I(04)後(44), I(05)前(24), II(05)前(63))

B-9	(a)大いに役に立つと思う。(就職のために環境心理領域を学ぶという感じ。)	(b)どちらかといえば役に立つと思う。	(c)わからない。	(d)あまり役に立たないと思う。	(e)まったく役に立たないと思う。(あくまで現時点での学問的興味として環境心理領域を学ぶという感じ。)
I(04)後	22.73% (10)	59.09% (26)	13.64% (6)	2.27% (1)	2.27% (1)
I(05)前	25.00% (6)	62.50% (15)	8.33% (2)	0.00% (0)	4.17% (1)
II(05)前	31.75% (20)	50.79% (32)	17.46% (11)	0.00% (0)	0.00% (0)

表2-11 B-10の集計結果(第1選択)

本学の環境心理領域を学んだ学生らしい就職先として考えられるものを2つ挙げてください。(第1選択: 回答数: I(04)後(44), I(05)前(26), II(05)前(71))

B-10(第1)	(a)建設・不動産	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売り・小売
I(04)後	15.91% (7)	6.82% (3)	0.00% (0)	9.09% (4)	0.00% (0)	2.27% (1)
I(05)前	3.85% (1)	3.85% (1)	7.69% (2)	3.85% (1)	0.00% (0)	0.00% (0)
II(05)前	4.23% (3)	7.04% (5)	0.00% (0)	5.63% (4)	4.23% (3)	2.82% (2)

	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
I(04)後	0.00% (0)	40.91% (18)	11.36% (5)	13.64% (6)	0.00% (0)
I(05)前	3.85% (1)	57.69% (15)	15.38% (4)	3.85% (1)	0.00% (0)
II(05)前	5.63% (4)	35.21% (25)	25.35% (18)	5.63% (4)	7.04% (5)

表 2-12 B-10 の集計結果 (第 2 選択)

本学の環境心理領域を学んだ学生らしい就職先として考えられるものを2つ挙げてください。 (第 2 選択: 回答数: I (04) 後(41), I (05) 前(24), II (05) 前 (70))						
B-10 (第 2)	(a)建設・不動産	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売り・小売
I (04) 後	4.88% (2)	2.44% (1)	2.44% (1)	4.88% (2)	2.44% (1)	0.00% (0)
I (05) 前	8.33% (2)	0.00% (0)	0.00% (0)	4.17% (1)	8.33% (2)	12.5% (3)
II (05) 前	5.71% (4)	0.00% (0)	2.86% (2)	7.14% (5)	7.14% (5)	4.29% (3)

	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
I (04) 後	4.88% (2)	24.39% (10)	41.46% (17)	12.20% (5)	0.00% (0)
I (05) 前	0.00% (0)	20.83% (5)	25.00% (6)	20.83% (5)	0.00% (0)
II (05) 前	4.29% (3)	20.00% (14)	24.29% (17)	17.14% (12)	7.14% (5)

表 2-12 B-10 の集計結果(全体 (第 1 位+第 2 位))

本学の環境心理領域を学んだ学生らしい就職先として考えられるものを2つ挙げてください。 (全体(1位+2位): 回答数: I (04) 後(85), I (05) 前(50), II (05) 前(141))						
B-10 (1+2)	(a)建設・不動産	(b)製造	(c)運輸	(d)情報・通信	(e)飲食業・宿泊	(f)卸売り・小売
I (04) 後	10.59% (9)	4.71% (4)	1.18% (1)	7.06% (6)	1.18% (1)	1.18% (1)
I (05) 前	6.00% (3)	2.00% (1)	4.00% (2)	4.00% (2)	4.00% (2)	6.00% (3)
II (05) 前	4.96% (7)	3.55% (5)	1.42% (2)	6.38% (9)	5.67% (8)	3.55% (5)

	(g)金融	(h)医療・福祉	(i)教育	(j)サービス	(k)その他
I (04) 後	2.35% (2)	32.94% (28)	25.88% (22)	12.94% (11)	0.00% (0)
I (05) 前	2.00% (1)	40.00% (20)	20.00% (10)	12.00% (6)	0.00% (0)
II (05) 前	4.96% (7)	27.66% (39)	24.82% (35)	11.34% (16)	7.09% (10)

2.2.2. 学問的関心の現状と推移

まず、本学で学びたい学問分野を尋ねた B-1 において、表 2-1 にあるように、前回の調査と比べて今回の調査では、「歴史」「公民(政経を含む)」「英語」「体育」「地理」と答えた学生が減少、またはいなくなっている。これは、一義的には、前回のアンケートでは、この設問の前に、大学入学前に好きだった、あるいは嫌いだった科目を尋ねる設問があり、前回の調査はこの設問の有無が影響したものと考えられる。しかしながら、その一方で、今回の結果は、入学後 1 年を経て、大学入学前の教科・科目と、入学後に学ぶ学問体系の違いが徐々に学生に浸透しつつありことを示しているという見方もできるかもしれない。

次に人間環境マネジメント学科における「領域」への志向性をみてみよう。本学科の「領域」は「心理学」、「家庭環境」「言語環境」の 3 分野によって構成されている。大学で学びたい学問を尋ねた B-1 (表 2-1 参照)において、明らかに環境心理領域を念頭においたと思われるキーワード、具体的には「(～)心理」、「福祉」、「言語学」、「社会学」だけをとってもその合計が 25(全体の 48.08%)となっており、また、3 分野の学問に対する関心の有無を尋ねた B-7 (表 2-6 参照)では、(a)「非常に興味を持つ」、(b)「どちらかといえば興味を持つ」の割合の合計が、84.78%(I (04)後)から 88.00%(I (05)前)へと、わずかながら増加している。回答数が半減している事実を考慮すると即断はできないが、それでも、人間環境マネジメント学科における「領域」へ関心が依然として高い水準にあることを指摘することはできよう。

「領域」に属する 3 分野間での関心の度合いを比べてみると、B-4 の結果(表 2-4)にあるように、今回の調査でもやはり「心理」への関心の高さが窺える。この結果は前回の調

査結果とも一致する。これらの分野の関連性を尋ねた B・5 (表 2・5 参照) では、前回の調査より約 7% 上昇している。これは、入学直後に II 期生に尋ねた場合の結果 (67.19%) と比べるとさらに興味深い。表 2・5 の結果から、入学後時間を経るにつれて、徐々にではあるが、学生の意識の中で 3 分野が有機的に結びつく過程を読み取ることができ、本学科のカリキュラムが有効に機能していることを示唆している。

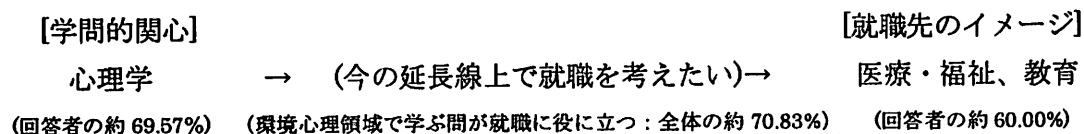
2.2.3. 就職観

就職観については、B・8 から B10 (表 2・7 から表 2・12) までの結果をみるかぎり、調査と今回の調査では特に有意な差は認められない。これは、前回のアンケートから半年の学修期間が、学生の就職に対する意識にまで影響を与えるものではなかったことを意味している。B・8 と B・10 は、環境心理分野と聞いて一般にイメージされる就職先と、本学が掲げている環境心理領域で学んだ先にある就職先とが、一致しているのか、あるいは異なっているのかを尋ねる設問である。前回の調査 (I (04) 後) ではこの意図がうまく伝わらなかったのではないかとこの反省から、今回の調査では設問にこと旨を明示したが、結果としては有意な差を見出すことはできなかった。

2.3. まとめ

今回の調査では学生の領域に対して、あるいは就職観に対して顕著な特徴を見出すことはできなかった。依然として、内藤ら (2005:72) で示した環境心理領域に対するイメージが根強いといえる。この傾向があるときから変化するのか、あるいはさらに強化されるのかについては、今後の調査結果を待ちたい。

図 2・1 環境心理領域に対する学生のイメージ



脚注

(1) 2 節の執筆は石崎が担当した。

3. 大学生 1, 2 年次の適応に関する検討⁽¹⁾

3.1. 目的

本研究は、大学生の適応に関連する諸変数を検討することを目的とするが、ここでは、大学 1, 2 年次の大学生生活満足度・大学生生活重要度・友人関係重要度の 3 変数のみについて検討を行う。

3.2. 方法

2004 年度生を対象に、2004 年度 (以下、1 年次) の 10 月と 2005 年度 (以下、2 年次) の同じく 10 月に、質問紙を用いた調査を行った。内藤ら (2005) に示された質問紙内容

のうち、今回は以下の3変数について取り扱う。

『大学生生活満足度』本学に入学して（本学での学生生活に）どの程度満足しているか、5件法により回答させた。

『大学生生活重要度』本学での4年間で自分の人生にとってどの程度重要であるか、5件法による回答を求めた。

『大学での友人関係重要度』本学での友人関係がどの程度重要であるかを5件法により回答させた。

3.3. 結果と考察

1年次と2年次の大学生生活満足度、大学生生活重要度、および友人関係重要度の平均値と変数間の相関を表3-1に示す。

1年次と2年次の大学生生活満足度には相関関係があることから、1年次の満足度が2年次にも影響を与えていると考えられる。また、1年次と2年次の友人関係重要度間にも正の相関が見られ、1年次において感じている友人関係の重要度は2年次にも影響している。さらに、2年次の大学生生活満足度は重要度とのみにおいて正の相関が示され、友人関係重要度とは有意な相関関係が見られなかった。内藤ら（2005）で示されたように1年次は3変数間すべてにおいて正の相関が見られたが、2年次においては友人関係と他の変数の間に関係性が見られない。

表3-1 学校生活満足度と大学生生活の重要度、友人関係重要度間の相関と平均値

		2年次			平均値	SD
		大学生生活満足度	大学生生活重要度	友人関係重要度		
1年次	大学生生活満足度	.43*	.18	.12	3.09	1.10
	N	23	24	24	44	
	大学生生活重要度	.23	.22	.30	4.04	.91
	N	25	26	26	47	
	友人関係重要度	.13	.05	.72**	4.33	.98
	N	26	27	27	48	
2年次	大学生生活満足度	—	.45**	-.14	2.83	.92
	N		35	35	36	
	大学生生活重要度		—	.12	4.14	.90
	N			36	36	
	友人関係重要度			—	4.25	1.00
	N				36	

** $p < .01$ * $p < .05$

次に、3変数それぞれについて、1要因2水準（年次）の分散分析を行った結果、友人関係重要度において有意な差の傾向が見られた（ $F(1, 26) = 3.58$ $p = .07$ ）。友人関係重要度は1年次から2年次にかけて低下する傾向がある。

このことは、学年が進行するとともに学生生活への満足度は友人関係以外の要因によって規定される割合が高くなる傾向を示すと考えられる。今後において、大学生生活への満足度を規定する要因を検討する際に、本研究の他節で用いられる変数との関連性を検討する

必要性があるだろう。

また内藤ら（2005）において、男子学生と女子学生とで大学生活への適応プロセスが異なる可能性が指摘されていることから、両年次の3変数の得点についても性による違いが見られるか、*t*検定による分析を行ったが、男子女子の間に有意な得点差は見られなかった。

次に、男子学生のみを対象とし、1年次と2年次の3変数について検討を行う。表3-2に相関と記述統計量を示す。

男子のみにおいても、友人関係重要度間には正の相関が示される。また、1年次には見られた3変数間の相関関係は2年次には見られなくなる。

男子の2年次における大学生活への満足は、友人関係や大学生活の重要度と関連があるとは言えなくなる。満足感を感じることに重要と考えるかどうかということは必ずしも一致しなくなり、対象を男女全体としたときに議論された、学問への関心や学業等、他の調査結果との関連性を検討する必要性の指摘は男子により当てはまる。

年次間の差は男子のみにおいては見出されなかった。

表3-2 男子学生の学校生活満足度と大学生活の重要度、友人関係重要度間の相関と平均値

		1年次		2年次			平均値	SD
		大学生生活重要度	友人関係重要度	大学生生活満足度	大学生生活重要度	友人関係重要度		
1年次	大学生生活満足度	.48**	.49**	.22	-.14	-.14	3.17	1.09
	<i>N</i>	29	30	16	16	16	30	
	大学生生活重要度	—	.55**	-.13	.02	.14	4.13	.85
	<i>N</i>		31	17	17	17	31	
	友人関係重要度		—	-.04	-.20	.58*	4.28	1.05
	<i>N</i>			18	18	18	32	
2年次	大学生生活満足度			—	.33	-.27	2.88	.95
	<i>N</i>				23	23	24	
	大学生生活重要度				—	.11	4.13	.92
	<i>N</i>					23	23	
	友人関係重要度					—	4.39	.84
	<i>N</i>						23	

***p*<.01 **p*<.05

女子学生の結果を以下に示す（表 3 - 3）

表 3 - 3 女子学生の学校生活満足度と大学生活の重要度、友人関係重要度間の相関と平均値

		1年次		2年次		平均値	SD	
		大学生生活重要度	友人関係重要度	大学生生活満足度	大学生生活重要度			友人関係重要度
1年次	大学生生活満足度	.42	-.05	.79*	.82*	.39	2.93	1.14
	<i>N</i>	14	14	7	8	8	14	
	大学生生活重要度	—	.39	.77*	.54	.41	3.88	1.02
	<i>N</i>		16	8	9	9	16	
	友人関係重要度		—	.48	.54	.93**	4.44	.81
	<i>N</i>			8	9	9	16	
2年次	大学生生活満足度			—	.73**	.00	2.75	.87
	<i>N</i>				12	12	12	
	大学生生活重要度				—	.15	4.15	.90
	<i>N</i>					13	13	
	友人関係重要度					—	4.00	1.22
	<i>N</i>						13	

** $p < .01$ * $p < .05$

女子において1年次の大学生生活満足度は、2年次の大学生生活満足度と重要度と正の相関を示した。1年次の満足度は2年次と強く関わっている。また、友人関係重要度間にきわめて強い相関が見られ、友人関係を重視するかしないかは1年次から予測可能であり、関係を重視する群としない群が存在することが考えられる。また、友人関係が固着している傾向の存在も考えられ、内藤ら（2005）の指摘するソシオメトリックテストを用いた検討を今後縦断的に行う必要性がある。

また、1年次には見られなかった、大学生生活満足度と重要度の相関が2年次において示された。このことは、入学した満足度により重要度が影響を受け、結果的に2年次の満足感も高まっていると考えられる（1年次重要度と2年次満足度も正の相関）。

次に、3変数それぞれについて、1要因2水準（年次）の分散分析を行った結果、友人関係重要度において有意な差が見られた（ $F(1, 8) = 3.58$ $p < .05$ ）。友人関係重要度が1年次から2年次にかけて有意に低下した。

3.4. まとめ

本研究では、大学生の適応プロセスを検討するという目的のもと、1、2年次における大学生生活満足度・大学生生活重要度・友人関係重要度の変化と関連性について検討を行った。

その結果全体的な傾向としては、1年次と2年次の友人関係重要度間には強い関連性があり、対人面でのポジネガな印象が大学生生活全般への関与や満足感とは独立する傾向にあることが見出された。

植村・小川・吉田（2001）は、国立大学の学生を対象とした4年間にわたる縦断研究の中で、入学時の満足感が友人関係や学習への取り組み態度に影響し、結果的に最終的な大

学への満足感に影響を及ぼすとする間接的な効果の存在を考察しているが、本研究の対象からは、2年次までの調査結果ではあるが、現段階では見出すことができない。本研究におけるサンプル数の小ささの問題もいなめないが、植村ら（2001）の研究対象の特徴として学部の雰囲気アットホームで友人ができやすいと述べられているのに対し、内藤ら（2005）では本研究の対象（とくに女子）の特徴について学内での対人面で十分な信頼関係や親密性を抱いていない可能性が示唆されている。大学生活への満足度と学内での友人関係の関連性の検討は今後、3、4年次にかけて引き続き検討する必要がある。

その一方で、女子のみを検討した場合、1年次には見られなかった大学生活への満足度と重要度の関連性が2年次には見られ、また1年次の満足度と重要度が2年次のそれへ影響している可能性が考えられた。1年次に経験された満足感が、その後において学校生活を大事なものとする度合いに影響し、結果的に2年次の学校生活を満足なものとする傾向に結びついたと考えられる。

男子においては、1年次に見られた、大学生活を重要と思う度合いと友人関係を重要と思う度合いが大学生活への満足度と関連するという傾向は、2年次においては明確に見出すことはできない。1年次においては、大学生活への期待や意味づけ、あるいは人づきあいが満足度を高める効果を有していたのに対し、2年次では大学生活への期待が高いことや意義を感じているからといって必ずしも満足感を感じられるわけではない。友人関係を大切にすることも、同様に満足感をもたらすこととは関連を持たない。逆に、意義を感じられなくても満足感を得ている学生像も存在している。

前述のように、この点について検討する上では学業を含む他変数との関連に注目していく必要が今後においてあるが、溝上（2001）は大学生の自己を研究対象としたインタビュー調査の結果より、学業は学生の自己評価を大きく規定することを前提とした上で、自己評価が否定的な学生は肯定的な学生よりも自己イメージと学業の関連性はより複雑であると述べている。内藤ら（2005）は、本研究の対象となる学生からは大学進学・大学選択において決して主体的とは言えない傾向が見られることを考察している。このことから、主体なく進んだ大学での学生生活の中では、学業を筆頭とする学生活動が、満足感を一義に規定するものではないだろうことが推察できる。

3 節 引用文献

- 溝上慎一 2001 大学生の自己評価の世界を意味づける学業的文脈 溝上慎一(編) 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学— ナカニシヤ出版 97-139.
- 内藤 徹・中川直志・石崎保明・坂本 剛・高橋陽子 2005 人間環境系学生の適応過程に関する縦断的研究 名古屋産業大学論集, 7, 67-77.
- 植村善太郎・小川一美・吉田俊和 2001 大学生の適応過程に関する縦断的研究(2)—大学生の学習への取り組み, および大学生活満足感に関連する要因の検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 48, 29-43.

3 節 注

- (1) 執筆担当: 坂本 剛

4. 本学学生の国際性に関する意識についての調査結果⁽¹⁾

4.1. 「国際性」という用語把握の難しさ

この調査を始めて約一年半になる。その間、人間環境マネジメント学科1, 2年生を対象に、1年生には2回、2年生には3回アンケートを行った。そこで今更ながら気づかされたことは、設問内容の難しさである。

「国際」という言葉は一時期一種の流行現象のようになり、大学においては国際関係の学部の新設が相次ぎ、高校では国際コースという専攻まで設けられたほどである。しかしながら、「国際」という言葉が流行語となりながら、その内容は深く検討されなかったように思われる。そのため、流行の嵐が過ぎ去ると、「国際」という言葉は今や「古い」という印象すら抱かれているように感じる。

それでもなお、本研究において「国際性」という項目を設けたのは、大学において学際的な学問を学ぶことが、本学学生の大学生活を意義あるものにし、その積み重ねが国際性を高めることにつながると考えたためである。

なお、今回の調査結果は、2004年度入学生（以下Ⅰ期生と表記）2回分、2005年度入学生（以下Ⅱ期生と表記）1回分の調査結果をまとめたものである。

4.2. 2005年4月時点における調査結果

表 4-1 英語に関する意識

		英会話は好きである		英語を話す機会がよくある		もっと英語力を上げたいと思っている		英語以外の外国語にも興味がある	
		はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
Ⅰ (04 後) 提出率 68.06%	全体 (回答数 49)	51.02% (25)	48.98% (24)	4.08% (2)	95.92% (47)	91.84% (45)	8.16% (4)	63.27% (31)	36.73% (18)
	内留学生 (回答数 16)	75.00% (12)	25.00% (4)	6.25% (1)	93.75% (15)	100.00% (16)	0.00% (0)	87.50% (14)	12.50% (2)
Ⅰ (05 前) 提出率 33.80%	全体 (回答数 24)	58.33% (14)	41.67% (10)	4.17% (1)	95.83% (23)	79.17% (19)	20.83% (5)	75.00% (18)	25.00% (6)
	内留学生 (回答数 8)	75.00% (6)	25.00% (2)	12.50% (1)	87.50% (7)	87.50% (7)	12.50% (1)	87.50% (7)	12.50% (1)
Ⅱ (05 前) 提出率 63.92%	全体 (回答数 67)	43.28% (29)	53.73% (36)	4.48% (3)	92.54% (62)	80.60% (54)	14.93% (10)	65.67% (44)	31.34% (21)
	内留学生 (回答数 18)	61.11% (11)	38.89% (7)	0.00% (0)	100.00% (18)	88.89% (16)	11.11% (2)	94.44% (17)	5.56% (1)

英語に関する意識（表 4-1）に対する回答からいえることは、いずれの調査とも英語力を上げたいという志向が非常に高いことがわかる。国際性に関するアンケート（表 4-2、

4-3) の集計結果を含めて、本学の学生が考える国際性とは、高い英語力を身につけていることだと考えていると言えるだろう。ただし、2004 年度入学生の回答結果を見ると、一回目のアンケートに比べ、2 回目のアンケートは、英語力向上に対する意識が下がっていることがわかる。

英語力向上に対する意識は、I 期生 2 回目 (05 前) と II 期性 1 回目 (05 前) が近い数値を示している点が興味深い。

表 4-2 国際性の向上に必要なと思うもの (複数回答可)

		母国語の会話・文章能力	自国の歴史の知識	自国の文化への造詣	自国の芸術への理解	外国語能力	その他	回答総数
I (04 後)	全体	13.86% (14)	20.79% (21)	15.84% (16)	15.84% (16)	32.67% (33)	0.99% (1)	(101)
	内留学生	10.34% (3)	17.24% (5)	20.69% (6)	17.24% (5)	34.48% (10)	0.00% (0)	(29)
I (05 前)	全体	27.27% (15)	16.36% (9)	9.09% (5)	10.91% (6)	30.91% (17)	5.45% (3)	(55)
	内留学生	22.22% (4)	16.67% (3)	5.56% (1)	5.56% (1)	38.89% (7)	11.11% (2)	(18)
II (05 前)	全体	17.16% (23)	22.39% (30)	14.18% (19)	5.97% (8)	32.09% (43)	8.21% (11)	(134)
	内留学生	11.43% (4)	14.29% (5)	20.00% (7)	11.43% (4)	40.00% (14)	2.86% (1)	(35)

表 4-3 国際性を高めるためにできると思うもの (複数回答可)

		留学生に対する学業支援	留学生に対する生活支援	青年海外協力隊への参加	ボランティアへの参加	教養を深めること	外国の歴史・文化の理解	その他	回答総数
I (04 後)	全体	10.71% (9)	11.90% (10)	7.14% (6)	15.48% (13)	20.24% (17)	32.14% (27)	2.38% (2)	(84)
	内留学生	15.79% (6)	21.05% (8)	10.53% (4)	7.89% (3)	21.05% (8)	23.68% (9)	0.00% (0)	(38)
I (05 前)	全体	13.46% (7)	13.46% (7)	9.62% (5)	13.46% (7)	25.00% (13)	23.08% (12)	1.92% (1)	(52)
	内留学生	21.05% (4)	21.05% (4)	5.26% (1)	10.53% (2)	21.05% (4)	21.05% (4)	0.00% (0)	(19)
II (05 前)	全体	4.08% (4)	9.18% (9)	14.29% (14)	15.31% (15)	26.53% (26)	27.55% (27)	3.06% (3)	(98)
	内留学生	19.05% (4)	19.05% (4)	9.52% (2)	4.76% (1)	23.81% (5)	23.81% (5)	0.00% (0)	(21)

国際性に関する意識に関するアンケート結果からいえることは、I期生は1回目の調査では視点が外国に向いており、外国語能力を重視(表4-4)、外国の歴史や文化を学ぶ必要を感じている傾向があった(表4-7)のに対し、2回目の調査では母国語能力の向上(表4-5)、教養を深めることを重視する方向(表4-8)へとシフトしている。その一方で、自国の芸術や文化への造詣への関心は、逆に低下しており、外国語以外の素養を身につける必要を感じながらも、では実際何をしたらいいと考えているか曖昧であり、本学の学生にとって、国際性はいまだ漠然としたものにとどまっているという結果になった。

本研究は縦断研究であり、あくまで補足であるが、II期生については、外国語能力の必要性を強く感じている点(表4-6)はI期生の後期(1回目)の調査と変わらないが、外国の歴史や文化の理解と同じほど教養を深めることを重視しているという特徴があり(表4-9)、入学年次によって特性があるようである。

現時点ではあくまで推測であるが、II期性がI期生に比して英語力向上の志向が高くないのは、教養を深めることを重視していることと関連があるかもしれない。

今回の調査では、本学学生が教養をどのようなものとして考えているかの設問をしなかったため、教養を自分自身の人間としてのあり方として考えているのか、それとも単なる知識量と考えているのかを明らかにできなかった。これは、学生の学問に対する姿勢ともつながることであり、今後の課題として残された。

また、本研究を継続していく上で早急に対策を講じる必要がある問題が浮上している。それは、アンケートの回収率の悪さである。必須科目がある1回目の回収率ですら60%台であり、学生が一堂に会する機会のない2回目の回収率はその半分にまで落ち込んでいる。本研究を縦断研究として遂行するためには、どのようにして学生に協力してもらうかが緊急の課題である。

4.3. 「国際性」を問う意義について

「国際」という言葉は頻繁に用いられるが、その意味はあまり吟味されることなく用いられている。しかし、次の点だけは明らかである。

「国際性」を備えた人というのは、無国籍人を指すのではなく、生まれ育った地域の文化の独自性を理解した上で、異なる宗教、文化、習俗、価値観などを持つ社会を受け入れる寛容さを身につけている人だということである。つまり、日本人であれば、「日本文化の特色というものをもう一度考え直してみ、それを立派なものに磨きあげることによって、これからの国際社会の中で、独自の存在として認められていく必要^②」があるのであり、それを基にして他国の民族や文化を認め合い、尊敬しあえる関係を築き上げていくことができるのである。

自国の文化の独自性を自覚することの難しさを指摘した先駆的思想家が九鬼周三である。

九鬼周三は、日本が明治になってヨーロッパの学問を受け入れ、西洋礼賛の風潮がある中で、言語の持つ民族的特性に着目した人である。

たとえば、自然現象を表す言葉ですら、各国語の持つ意味合いが異なることを示している。

もとより、いわゆる自然現象に属する意味および言語は大なる普遍性をもっている。

しかもなおその普遍性たるや決して絶対的なものではない。例えばフランス語の ciel とか bois とかいう語を、英語の sky、wood、ドイツ語の Himmel、Wald と比較する場合に、その意味内容は必ずしも全然同一のものではない。…国土と住民によっておのおのその内容に特殊の規定を受けている。自然現象に関する言葉でさえ既にかようであるから、まして社会の特殊な現象に関する語は他国語に意味の上での厳密なる対当者を見いだすことはできない⁽³⁾。

九鬼周三は、日本文化の独自性、日本人の生き方の独自性を「いき」を構造化して表すことで示そうとしたのである。

ただし、自国の独自性にこだわることは危険なことでもある。暴力的なナショナリズムに転化しかねないからである。そのため、九鬼周三の思想は、戦前の日本の軍国主義的ナショナリズムに利用されかねないものであった。

しかし、九鬼周三が指摘したような、文化的共通性が基盤にあるからこそコミュニケーションが成立するということの意義は、戦後丸山真男も注目している⁽⁴⁾。

日本は明治になって西洋の学問を吸収したとき、個別に専門分化した形で受容してしまった。そのために、各学問分野間にコミュニケーションが成立するための共通の言語を持たないまま現代までできてしまったと丸山真男は主張している。そのため、日本の学問がどういう事態になってしまったかを次のように述べている。

自然科学者と社会科学者との間に、われわれは本質的に同じ仕事をやり同じ任務をもっているという連帯意識というものが非常に乏しい、いや大学や学界の哲学と社会科学というものの間にも内面的な交流がほとんどない。…それぞれ社会学者として、あるいは文学者として、自分たちの持っている共通の問題を学問的に話し合おうとすると、これは共通の言語が非常に乏しいのです⁽⁵⁾。

専門分野間のディスコミュニケーション状態を丸山真男は危惧していたわけであるが、今回の調査結果では、I 期生については、「国際性を高める」ために「母国語能力の向上」、「教養を深めること」を選択する学生が 1 回目の調査に比して高まっており、II 期生についてはまだ 1 回目の調査であるが、教養を深めることを重視する学生が多いことが特徴としてあげることができる。

本学学生が、「教養」や「国際性」を具体的にどう認識しているかを明らかにしていくことが今後の課題としてあげられるであろう。

本学はアジアからの留学生を多数受け入れており、自国についての理解を深めつつ他国の歴史や文化を尊重する姿勢をはぐくむ上でも、また本学に入学した学生全員にいえることであるが、大学での学修を充実したものにする上でも、「国際性」を問うアンケートを継続して行っていくことは十分意義あるものと考えられる。

4 節注

- (1) 第4節は高橋が設問作成、集計、執筆を担当した。
- (2) 会田雄次『日本人の生き方』、講談社学術文庫、1976年、25頁。
- (3) 九鬼周三『「いき」の構造』、雑誌『思想』昭和5年1月、2月号初出。講談社学術文庫、2003年、13-14頁。「いき」の持つ意味合いは、「いき」な着こなし、「いき」な柄などのように用いられるが、別の言葉で言い表すには非常に微妙な表現であり、共通の文化的背景を持つからこそ、人びとの間にリアルなイメージが共有されるのである。
- (4) 丸山真男『日本の思想』、岩波新書、1961年。
- (5) 丸山真男、前掲、133-134頁。

5. 調査全般を通じて

今回の調査は、前回の調査から約半年間(3節は1年間)の適応過程を分析したものであり、(i)心理系への強い関心が高い(1節、2節)、(ii)就職先として医療福祉系を目指す学生が多い(1節、2節)、(iii)外国語、特に英語力に対する志向性が高い(4節)、の3点においては大きな変化はないと考えることができ、領域として引き続きこれらへの対応が求められることになる。その一方で、上記3点についても細部においては意識の変化とも取れる兆候もみられ、今後のさらなる調査が待たれる。

3節は1年間という比較的長い期間の適応過程を調査したものであり、学年が上昇するにつれて、大学生活の重要度と満足度が友人関係の重要度とは別の要因によってもたらされる傾向が強くなるという指摘がなされている。

最後に、すでに執筆者のすべてが指摘しているように、I期生に対する今回の調査は、2004年後期セメスターに行った第1回目の調査と比べて、回答者数が約半減している。これは、2005年度前期セメスターにおいて、I期生の全員、あるいは大半が揃う機会がなく、一斉にアンケートを行う事ができなかったことが大きく影響しているが、この研究の継続と結果の妥当性に重大な影響を持つ。回答者数の減少に関していえば、アンケートが学生の手元に届いているにもかかわらず、その学生からの回答用紙の提出が得られなかったというケースもあった。本研究の質問項目は多く、また多岐にわたるため回答者が負担を感じるのには理解できるが、本研究が単なる研究目的ではなく、教育へのフィードバックを意図している事を十分に理解してもらい、協力を得る努力を環境心理領域として継続していかなければならない。

*本研究は名古屋産業大学・名古屋経営短期大学環境経営研究所より助成金を得ている。ここに記して謝意を表したい。